

# 所 報

## No. 19

佐賀県立教育研究所

も く じ

- 昭和51年度 研修講座から ..... 1~6
- 昭和51年度 研究紀要の紹介 ..... 6~7
- お知らせ(庁舎移転について) ..... 8

### 昭和51年度研修講座では

### こんなことを学びました

#### 〈小学校国語指導講座〉

##### 読解指導における書く活動

##### 1. 書く活動の意味

###### ○ 学習の個別化

書くことによって、ひとりひとりの子どもが、自分で読み、自分で課題を解決する必要に迫られる。どの子どもも、読まなければならない学習の危機的立場に立たされ、そのため読み手を主体的にする。

###### ○ 読むことの充実 — 確かさと豊かさ

書く 書きながら読む、書きながら考える、書きながら味わうという活動は、読みの再構成をはかるなど読みの姿勢を変え、感性や思考の深まりへ導く。

ひとりひとりが、自分の読みを自分の言葉で書き、発表することによって、自分の立場がはっきりし、発表が個性的になる。それは比べよう、確かめようという意識を導き、新しい問題の発見や思考の進展を促す。

###### ○ 目標の明確化

読み取ったこと、考えたことが書けた。それは、学習目標が達成されたことである。書く作業を位置づけることによって、目標を行動化して設定することができ、より明確になる。

###### ○ 評価・定着

書く活動やその結果を見つめることによって、個々の子どもの読み取りの程度が的確にはあくされ、子どもの実態に即した指導が可能になる。

書いたことをもとに話し合いをする。その過程で、子どもたちは、自分の読み不足、間違いの自己評価ができる。その結果をもとに書き直し、書き加えをすることによって、学習が定着する。

##### 2. 書くことには、どんなものがあるか

- (1) 本文へのアンダーラインや記号づけ
- (2) 文章視写 (3) 文章注記、補充、添加
- (4) 挿話説明 (5) 漫画吹出し
- (6) ○次感想 (7) 文章の要約、図式化
- (8) つづき話 (9) 手紙 等

##### 3. 書くことを位置づけた読解指導の実際

- (1) 学年 3年 指導者 神崎小 中村由利
- (2) 単元 話のうつりかわりに気をつけて読もう — ピノッキオ—
- (3) 進度 5/12
- (4) 教材文

あるところに、ゼベットという人形作りのおじいさんがいました。

ある日のことです。ゼベットは、男の子のあやつり人形を作ろうと思いました。

はじめに、頭を作り、それにかみの毛をつけました。それから、目を作ると、その目玉が、ゼベットをじろじろ見ました。鼻を作ると、その鼻が、急に長くのびてきました。口を作ると、べろりとしたを出してゼベットをからかいました。両手を作るといきなりゼベットのかみの毛を引っばりました。両足を作ると、さっと外へとび出していきました。

この人形がピノッキオです。

##### (5) 本時の目標

ピノッキオの作られていく過程を読み取りながら、ピノッキオが元気なはずらっ子であることをつかむ。

##### (6) 学習の展開

① 目標(過程) — 読む目標を明確にし、読む課題・構えを作る。

○ この物語の中心となる人物はピノッキオである。「ピノッキオは、どんな子か」を読みとろう。

② 方法(過程) — 課題に答えるための読みの範囲・方法・技能を話し合う。

○ どんな順序で作られたか、その時ピノッ

キオはどうしたかを読みとり、プリントに整理する。そして、様子を想像しながら、ピノッキオのことばを書こう。

- ③ 学習(過程) — 課題に答えるために、方法に従って読む活動をする。
  - 個別に、読み進めながら、場面の情景をとらえ、プリントに書き込む。
  - 教師は、座席表に、読みとりの状況をチェックしながら、個別指導を行う。

[プリント形式]

問題			
1	頭とかみの毛		
2	目	(じろじろ見た)	
3		( )	
4		( )	
5		( )	
6		( )	

- ④ 確認(過程) — 学習した内容を話し合い確かめる
  - ピノッキオが作られていった順序と、その時の行動を確かめる。
  - ピノッキオが言ったことばを想像して書いたことを発表し合う。
  - ピノッキオはどんな子か、意見を出し合う。
- ⑤ 調節(過程) — 確認したことをもとに、読み直しをする。
  - 話し合いで聞いたことをもとに、読み直し、プリントの書き直しや書き加えをする。
- ⑥ 獲得(過程) — その時間の学習目標を獲得する。
  - 自分で考えた吹き出しを本文に入れながら朗読する。



## 〈中学校 英語教育講座〉

### 講演要旨

「英語授業のあり方」— 中・高の連携の面から—  
 広島大附属中・高校教諭 田鍋 薫 先生

#### I はじめに

中学1年の授業は復習中心の授業であり、同じスタートラインからの出発であるので、学力的にあまり差は見られないが、2学期ぐらいから「書かせる」段階に入ってくると、学力差が出はじめる。中学生に対しては、全く与えられた教材を理解させ1つでもおぼえさせるように指導する。高1からは、自分で予め調べてくるように指導し、一応つきはなした授業形態に変わる。中学校での親切な指導に比べて、高校のつきはなした指導姿勢とその上3種類もの教科書といったことで、生徒の受ける英語授業に対する印象には、中・高間に相当なギャップがあるように思われる。

#### II 教室学習

##### 1. 授業を構成するもの

1) 教師 日ごろの授業を反省する場合、生徒に対する批判的立場からばかりでなく、教師はどうなのかという視点も必要である。良い教師とは (A) 教生に対する生徒の意見 ①教師の声・話し方(小さい声、早口、不明瞭な語尾は生徒の注意をじゅうぶんに引きつけるのに妨げとなる)②教師の視線(生徒の目をみでの授業、そのためには周到な準備が必要)③身嗜み(生徒の前に立つ教師はその外見からも何らかの影響を与えるものである)④人柄(生徒とよくなじむ人は同情的で愛想よくフランクでユーモラスな人である)⑤自信(教師の実力+周到な準備が自信を生む)、(B)インディアナ州立大学

の学生の意見 ① A good teacher teaches you. ② A good teacher doesn't make fun of you. ③ A good teacher has patience. ④ A good teacher makes you work. ⑤ A good teacher is concerned about you. ⑥ A good teacher rewards you when you do good work.

2) 生徒 生徒は能力、性格、興味、関心について極めて多様である。生徒一人ひとりの実態を的確につかんでおくことが必要である。  
 3) 教材 自主教材の編成は実際問題として困難である。従って、「教科書を教える」ということを基底にして、それに「教科書で教える」ということを適宜加えていくべきではないか。音声・文法・文型については特に早い時期からたいておく必要があり、語い、文化については「教科書でも教える」という態度が肝要である。

##### 2. 授業のあり方は教材研究でできる。

1) 既習教材を再確認して「何を」「どう」取りあげるかの2点から教材研究に取り組む必要がある。

2) 教材研究を支えるソースとしてはTMを参照し利用することはもちろん、日ごろの研修から教材に関係ある資料を多く蓄え、日々の授業にTMを補う材料として活用する態勢が必要である。

##### 3. 授業を効果的にする工夫

1) 目と耳の両方からさせる。時間のロスをさけるためにも、いつまでも音声だけに頼ることは好ましくない。早い時期から絵とか文字といった視覚的なものを示して、多感覚にうったえる指導をした方がよい。発音記号も中1の段階で取り扱ってもよいと思う。

2) 授業の進め方に、学年・教材に応じたアクセントをつける。One thing at a time の原則を守り procedure に一貫性を持たせ、指導過程

の上で zigzag な授業はさけるよう努める。

3) 意味のあるドリルとおもしろい授業の工夫余りにも機械的な無味乾燥なパタンドリルはさけて、生徒の身にかかわりあいのある練習を多く取り入れるように努める。常に授業をおもしろく保つためには、生徒が楽しく思ふ背景的知識を教師は日ごろから蓄えるように努めるべきである。そのためにはユーモアに関する本などを数多く読むことも効果がある。

#### 4. 自力で学習を進めようようにする授業

1) 学校の授業はどこまでやれるか。学校での指導には限度がある。従って、特に高校では自主的自発的学習方法について、辞書の引き方、速読の仕方、予習の方法など具体的に時間をかけて教室で指導する必要がある。予習の仕方についての指導は案外なされていないのではないか。

2) 教師が教室で指導すべきものと、生徒の自学自習にゆだねるものとの判別を的確にする

必要がある。

3) 英語に対処していく態度・方法を体得させる試み。聞くことの難かしさ、日英両語の相違点、読解を進めるときの態度、方法などについて、授業を通して体得させていくように指導する。

#### 5. Learners を生かす授業

1) 生徒のおかす errors を生かすこと。生徒がおかす誤りを make fun of することなく、そのことから学び取る姿勢が大切である。

2) 生徒一人ひとりに sense of achievement を与える授業になるよう配慮する。生徒一人ひとりの学力に見合った目標を定めて、それぞれに「成就感」を与えるような評価をしてやるのが重要である。生徒のことを中心に考えないでは、授業のあり方は論じられない。

They are slow learners, but they are learners and are learning.

## 〈高等学校国語科指導講座〉

### 「読むこと」と「書くこと」の指導

昭和51年度高等学校国語科指導講座は8月16日から18日まで、お盆明けの暑さに負けず、広島大学 野地潤家教授、北九州大学 江頭太助教授ら屈指の講師、指導助言者を招き、約30名の参加者を得て開催されたが、その折の野地潤家教授の講話『作文指導の諸問題』の要点を述べると、次のとおりである。

#### 作文指導の諸問題

#### 1. 高等学校作文教育において何をなすべきか。

##### (1) 書写力の向上

小・中学校時代から堅固に習得されていないなければならない書写力が、テストの答案などを見ると、決して十分でないことがわかる。社会人としての将来を思うにつけても、文字の書きぶりは、もっときちょうめんにしつていくようにしたい。

##### (2) 明確な文(センテンス)表現への基礎訓練

これも基本的な事ながら、一般に文意識が低く、何が文かというわきまえも不十分なものがある。句読点についての自覚の乏しさや文表現についての主語・修飾語などの使用の不的確さなど基礎訓練の不足している部分について指導しなければならない。

##### (3) 論理的思考・形象的思惟の鍛練

高校の作文教育で目指すべき項目の中心に据えてしかるべき事からである。論文体テストなどに見られる弱点多く思考力の弱さに基づいているのを見れば、論説文などの読解指導の面だけでなく、表現指導の面でこの論理的思考・形象的思惟について鍛練してい

なければならない。

#### (4) 表現生活における自律的態度の育成

高校作文教育の究極の目標の一つであってその達成は大学・大学院の課程段階まで待たなければならないかもしれない。しかし、高校での自律的態度の育成は、ぜひ重視してかかるべきもので、日記・ノート・レポート・感想・創作等について、生徒各人が進んで工夫し、継続していくように導いてやりたい。

#### 2. 高校生の表現生活における自律的態度の育成は、どのようにして可能であろうか。

(1) 自己の文章をどのようにしてわきまえさせるか。文章を書く経験の乏しさから自己の文章に自信を抱くことのできない者もかなりいる。自己の書き得た文章を自らつきはなして確かめ、かつ自己評価することができない。そのため、文章をまとめていく裁量、あるいは、ある種のゆとりというものを持ち得ないでいる。

自ら自己の文章を発見していく — そういう「文章の発見」が、自らの文章を育てていく。文章表現における自律的態度を育成していく根源には、「文章の発見」、つまり「文章開眼」がなくてはならない。

(2) 「文章開眼」はどのようにして得られるか。文章というものの意義・効用・価値・方法・鑑賞・評価 — どの一つについても「開眼」はありうる。そしてそれは、やがて文章制作の熟達へつながる。

自己の文章の生命に触れて文章の呼吸をつかむこと、それこそ「開眼」というべきであろう。

(3) 文章の呼吸をつかむということは、どういうことか。室鳩巢は「駿台雑話」でその間の

消息を端的に説き得ている。文章への悟入がどこにあるか、それはどのようにしてなされるか。それへの手びきとして素朴ではあるが、それが多読・愛読・熟読に求められていることは示唆深い。

- (4) もちろん、「作文は読書にあり。」は「作文は覃思(思ひを深くする)にあり。」であってそのほかではない。作文への読書は、漫然たる読みであってはなるまい。

自己の求める心にかなり読書をと心がけ、「わが心悅するところ」を得るようになって、はじめて文章への悟入の道もひらけてくるであらう。

● 終わりに —

自己の文章を大事にしている人に接すると、おのずと畏敬の念を覚える。自己の文章を大事にする人は、自己の文章ばかりでなく、自己の生活を大事にしている人である。

他の文章を大事にし合うこと、これはやさしいようで難しい。自らの文章を自ら軽く扱うことは、少なくないからである。ひとの文章を軽く浅

く読みすぎすこともまた、少なくないからである。

速い人々の優れた文章に憧れ、近い人々の優れた文章にいっそうの刺激を受けることが多い。だれしも、自己の文章表現に規範となすべきものを見だし、そこから自己の文章を出発させている。だれの、どのような文章を規範としていくのか。自他の文章を大事にしつつ、それを深めていくのは、どうすればいいのか。いずれも、求めつつ、出会い、心がけつつ、悟るというように、進んでいくのではなからうか。

高等学校作文教育が更に発展をとげるためには、指導者・学習者の表現生活への厳しい意欲的な省察と設計が必要であらう。巨視・微視の両面から、高校作文教育の未来像を描こうとすれば、表現生活を通じて創造と探究への熱意が、どれだけ湧きわたっているかを、まず問わなくてはなるまい。



## 〈高等学校数学教育講座〉

### 講演要旨と反省

#### 〈演題〉 数学の教科書について

佐大助教授 国次太郎先生

教育における主たる教材としての数学教科書は明治のはじめ、中等学校では外国語の教科書しかなかった。明治20年ごろも教科書はなく、明治38年の国定教科書が出るまでの間は、同一著者による問題集とペアになった書物が出版されていた。

この問題集中心で、要領、例題、問題といった形式の教科書と、入試準備としての数学が、黒表紙国定教科書以後今日まで、わが国の数学教育のバック・ボーンをなしている。

教科書の編集に当たっては、表に出る人、裏に出る人、会社の編集係、営業係と多数参加して、それぞれの個性がよくあらわれる。

次に検定制度的についてはその組織や基準、実施細則などいろいろあるが、教科書調査官としての過去の体験からいえば、数学科4名の係官では、人手不足で、個々の教科書の問題の難易、内容分量の検討まではじゅうぶんでえず、原稿、校正刷、見本と進む作業はなかなか重労働だった。

教科書に関してみると、高校では、学習指導要領との関連に、小中校では採択方法に問題点があるように思う。

最後に、教科書は、多種多様(小中では6種類、高校では数学一般8種類、数学I 20種類、数学II A 15種類、II B 16種類、数学III 14種類、応数7種類)あり個性も出て、バラエティに富むが、反面、検定制度を通じて指導要領による拘束、学年進行の重視や平等主義保守主義など色濃くあ

らわれ、結果的には、ある種の統一がなされているといえよう。

#### 〈演題〉 51年度大学入試における数学問題の検討 — 特に新課程との関連 —

久留米工大教授 稲葉三男先生

今春の入試から新課題で実施され、数学では、行列、写像をはじめいわゆる新教材の出題もあっていろいろ問題点もありそうだ。

特に、行列について、次の6種類に分けて各大学の問題を細かく分析検討した。

- A グループ 基本的で良問または手ごろな問題
- B ♪ 直接容易にはとけず、ある程度工夫を要するもの
- C ♪ 基本的ではあるが、主要部分が他領域に属しあまり好ましくないもの
- D ♪  $2 \times 2$  行列の逆行列公式を強要し発展性がなく末梢的なもの
- E ♪ 大学の数学内容を対象にしたもの
- F ♪ 高校数学の範囲をはるかに越えるもの

注 紙面の都合で、具体的な大学および問題番号は省略

行列は、出題された大学も多くまた上の分類で、A、Bに属するものが、約2/3はあるようだが、残りはCからFまでのグループに属する。

また集合論理、写像についても同様な分類調査を行ったが、結論的には、まだまだC~Fに属するいわゆる悪問が出されている。

高校の教師は、入試に関してもっと大学教官との意見交換の機会や場所を作り、勇気を持ち、堂々と物申すことが必要ではないか。

私自身、九数教会長という立場でもあり、数学教育については、文部省や大学などに対して、率直な意見や批評を述べている。

最後に10月6日教課審から発表された「審議のまとめ」についてふれると、高校数学の場合、数学Ⅱ、代数幾何、基礎解析、微分積分、確率統計の5科目に関する選択制が一番問題点ではないだろうか。過去の解析Ⅰ、Ⅱ、幾何の時代のことを反省しても、今回はそれ以上に、高校の教師、生徒はもちろんのこと、入試出題の大学教員まで、かなりの困惑と混乱が生ずる危険性があるように思う。指導要領の改訂は、精選集約、軌道修正は当然としても、急激な変化は絶対慎むべきで連続的な変革でなければならない。

〈反省〉 講座は11月4日から6日まで、県庁南別館会議室で行いました。第1日目は上記国次先生の「数学教科書」と「小中高一貫の数学教育」と関する2つの講義、第2日目は山口所員の「数学Ⅰに関する学習指導上の問題点」についての発表と上記稲葉先生の講義、最終日は科目ごと

の「学習指導の問題点と改善策」についての協議という日程でした。授業のある平常日ということもあって、出席者は約30名。公立私立の数学担当の先生方が熱心に研修されました。

現在、夏休みに、学校教育課主催で高校数学現代化講座があり、ここでは文部省発行の「新しい数学教育」をテキストに大学教員を講師とした講義中心のものが実施されています。そのため今年度から開始した当研究所主催の講座では、重複をさけ、協議や発表など、出席者全員が発言し討議し合うことに重点をおいて計画しました。講義の後でも15分～20分の質疑の時間をとりました。

しかし、研修講座ははじめてということで、内容方法はもちろん、場所や駐車場までいろいろ不備な点が多く、出席者に御不満な点が多かったことを反省しています。

最後に提出していただいたアンケートを参考に講師や演題、内容方法、時期などをじゅうぶん検討し、よりよい研修を目指して努力したいと思います。

今後とも、みんなの自主的協調的な研修の場として参加し活用して下さるようお願いいたします。

## 〈中学校教育相談研修講座〉

### 講演要旨

#### 『カウンセリング演習』

東京都立教育研究所 相談部長  
小泉 英二 先生

カウンセリングの目標は「行動の変容」「人格の変容」をめざしたものであり、その特質として、言語を通してのふれあいを継続しておこなうことが考えられる。学校教育相談は、1%の問題児を対象とするのではなく、99%の普通児を対象とするものである。カウンセラーは、児童、生徒の感情や気持ちのふれ合いや、「今、どんなことを考えているのか」を大切に、「いい」とか「悪い」とかに敏感であってはならない。

次に、夜中におぼけがでそうで、幻聴をきたし情緒不安で不眠を訴える高校1年男子生徒の録音テープを実際に聴きながら説明があった。場面構成の必要性とともに、クライアント(来訪者)に対しては、白紙の態度で臨み、問題を理解し、相手の気持ちを理解することが必要である。助言はできるだけひかえて、自分の問題を自分でみつめることができるかどうかのポイントである。物事を因果論的に理解しようとする人が多いが、「どうしてそうなったのか」という態度で接すると、きかれた事のみしか答ええないという形になる。相手の気持を理解することからはじめて、何回かカウンセリングを続けるうちに、あとで原因などが自然にわかってくるものである。相手の話をよくきくということは、「うん、うん」「ふん、ふん」「なるほど」というように単純な受容から、モヤ

モヤしたものをもとめてかえしてやったり、明確化してやったりする必要がある。そして、相手が最初には気づかなかった事に気づくという変化があらわれて、段々に落ち着きをとれどすのである。

沈黙が続く時は、相手は「今、何を考えているだろうか」ということを、カウンセラー自身も考え、相手が沈黙を続けている時に、口をきくときは、「今だまっていたけど、私は、君は何をを考えているかを考えていたけど君はどうですか」ときりだしたらどうであろうか。

直接的な助言や援助はどれ位役立つか疑問である。カウンセラーが逃げるという事ではなく、相手が何を思っているかきき、本当にうまくいった治癒のケースは、自分で考え、自分で実行し、なおった人である。

学校現場でも、「あの先生はよくきいてくれる」「よくわかってくれる先生だ」と児童、生徒が感じている場合は、カウンセリングでは、長続きする大切なことである。普通児との出会いでも「話してよかった」「話をきいてもらってうれしかった」というきき方で接する態度が必要であり、これは、教育全般についていえることだと考えられる。

#### ☒ ロールプレイング(役割演技)

次に、このことを実際場面を展開することで、理論を体験的に自分のものにして明日からの生徒指導に役立たせようとした。

まず、受講者が5名～6名1組になってグループをつくる。メンバー中に、カウンセラー役と生徒役をつくり、他は観察研究者となる。これを5

分～10分で交代してカウンセリング場面の実演をするのである。生徒役の先生は、自分の受け持ちのある生徒を念頭において、その生徒になったつもりで、相談を持ちかけてもよいし、自分自身の問題をカウンセラーに述べてもよい。望ましいのは、真実味という意味で、参加した先生方が自分自身のことを述べた方が、真のカウンセリング場面の展開に近づける。カウンセラー役は、今日までの3日間の理論的学習で学んだものを、ここで発揮するわけである。特に前記の録音テープの分析が生かされる。約50分のロールプレイングでカウンセリングの体験学習をするわけである。

- 受け持ち生徒の問題児になったつもり相談……（この内容が多かった。）
- 自分自身の生徒指導上の悩みの相談………（カウンセラー役も、観察の先生方も思わず真剣になった。）
- 自分自身の個人的な悩みの相談………（カウンセラー役も、観察の先生方も深刻になってきて時間が足らず、このままでは終われない気持ちになってしまった。）
- 自己の人生観と生き方についての相談………（クライアントになった方が、胸の中の

固りが少し楽になったと述べている。）  
などいろいろな形のロールプレイングが展開された。その後、各グループごとに、生徒役、カウンセラー役、観察者役それぞれから感想の発表があり、それに対してアドバイスがなされた。

特に生徒役になった先生が、「話しやすかった」「よく聞いてもらえた」「よくわかってもらえた」「安心して話がされた」と感じたかどうか視点をあて、そう感じてもらうためには「どのような気持ちで……」「どんな態度で……」「どのように……」きくのがよいのか、特に「今、どんな気持ちで話しているのか」に敏感であったかどうかをカウンセラー役ひとりひとりに問いかけながら指導が展開された。

- 今まで、多少は生徒と面接をしてきて、わかったつもりだったが、真のカウンセリングについて、再体験できた。
- 理論と実際について、本当にいい勉強ができた。毎日の授業、学級指導に生かしたい。など、受講の先生方にとって充実した研修であった。今後の教育実践に生かすことで、この講座を意義あるものにして頂きたいと願っている。

## 昭和51年度 研究紀要の紹介

### <研究紀要第89号>

行動目標による読みの指導に関する研究  
桜井直男・泉 建一

授業設計に当たって、まず目標を明確にすることが重要なことはいまでもない。が、国語科では、これがどこかばくぜんとして、抽象的なものであった。それだけ授業に甘さがあったことはいなめない。ここに国語科の体質改善、国語科の科学化がいわれるわけである。行動目標論の導入は目標の明確化、学習活動の個別化、評価の工学化等、ひ益されるところが大きいと考えられる。

この研究では、実践可能なところで、行動目標を設定して授業を試みた。即ち、目標を明白に具体的なものとして、書くこと（行動）を読みを生かし、その評価を学習活動と一体としてとらえるよう指導過程を組織した。ひとりひとりの学習をより完全にしようという願いをもって、授業のシステム化を考えたわけである。

国語科の授業改造をめざしての一つの試行として、研究委員6名の方に御苦勞をお願いし、実験授業をとおして、コミュニケーション分析や、授業効率などからもいろいろ考察してみた。が、まだじゅうぶんの結論を得るに至っていない。本紀要にあるいくつかの実践事例をお読みいただいて、本研究の意図するところをおくみいただければありがたい。

### <研究紀要第90号>

高校生に対する韻文の創作・鑑賞指導  
の研究 — 現代俳句の指導を通して —  
脇山 正大

昭和50年度は、詩・短歌・川柳について、それぞれ創作体験のある研究委員による研究を実施してもらったが、昭和51年度は、前年度と同一のメンバー（いずれも俳句創作については未体験）に若干の創作体験を積んでもらい、そのあと、創作を含んだ俳句の授業を実施してもらった。それらの指導事例をまとめて若干の考察を試みたわけだが、特に佐賀西高校の2年生を指導してもらった公開授業の経過報告等は、各学校における韻文教材取り扱いの際の参考資料になりうるものと思う。

- (1) 韻文教材を丹念に取り扱うことによる想像力と創造力の向上
- (2) 綿密な表現指導による使用語彙の増加
- (3) 自主性に富む韻文創作の授業による国語に対する興味・関心の喚起

が、現代俳句の指導を通してどのくらい可能か、ということを探るとともに、指導教師の得た若干の創作体験が、授業指導の際、どの程度役だつものかということについて、併せて考察を進める。

指導の方法、結果、残された問題点について、御教示が得られれば幸いである。

<研究紀要第91号>

算数科における学習能力の発達と授業  
に関する研究(第3年次)

松村 静二

算数科で「わかる」ということは、ある問題なり、概念なりに対して、既知の知識・経験が前提としての資格をもっているということである。

例えば、右のような「九九一回適用虫くいわり算」について、3年から6年までの正答率は下のようになっている。

a	○	b	○
5) 〇9	〇) 〇6		
3〇	〇〇		
4	6		

課題(A)を同化した「ウ型」である。しかし、bの問題に対しては、3年生の大部分は、手が出せないでいる。これは、課題(A)が前提能力(B)の射程内にない「ア型」である。学習が成立する(「わかる」)のは、BとAにひっかかりがある(調節可能)「イ型」とBがAを同化している「ウ型」の状態のときである。

本研究は、このような縦断的手法(3年~6年)とその結果を生かした実践授業の考察を通して、子供サイドの前提能力(B)と課題(A)との均衡関係の成立について究明しようとするものである。

本研究は、このような縦断的手法(3年~6年)とその結果を生かした実践授業の考察を通して、子供サイドの前提能力(B)と課題(A)との均衡関係の成立について究明しようとするものである。

<研究紀要第92号>

高等学校数学Iに関する生徒の学力  
及び意識の調査

山口 圭一

現在、高校の低学年で全員必修となっている数学Iに関して、テストとアンケートをもとに、調査集約したものです。普通校3校、実業(工業)校1校、あわせて4校の各1クラスずつの2年生170名余りを対象にしたもので、クラスごとの細かい分析結果は公表できなかったけれども、全体的な集計や1年生の数学Iの成績(五段階評価)との関連など、かなりくわしく調査発表をしています。

最近、日教組や国立教育研究所などから、学力調査に関する研究調査が、あいついで発表されており、その面では、新鮮味に欠ける点はありませんが、現場での実践に即して、日々の学習指導の中で、生徒を観察し評価して行く場合の参考資料研究資料として、先生方のお役に立てばと思ひ作りました。

特に、4名の研究委員の先生方の御協力をえて紀要が発刊できたことを、心からお礼申し上げます。

高校数学科の諸先生方へ、ぜひ一読していただ

き、御高見や御鞭撻を賜りますよう、お願いいたします。

<研究紀要第93号>

中学英語における聴解訓練のための教材  
畠山孝郎・山口 実

英語学習において、Hearing, Speaking の能力を高める手段として、L.L.を使用することが年々盛んになり、各地の学校でこのような設備が整えられつつある。しかし公立の中学校では、英語の特別教室をもちFull Lab.の設備をもつことはきわめて困難な状態にある。私達は機械に使われるのではなく、まず現有の機械をじゅうぶん活用することから始めなければならない。例えば、どの学校にもあるテープレコーダーにしても、じゅうぶん活用することによってその効果ははかりしれないものがあると思う。このことは、英語科の視聴覚は1台のテープレコーダーの利用からと言ってもよさそうである。この場合、テープ教材の作成と教材が問題であろうから、当教育研究所では上記の教材を佐賀大学教育学部 大里文人助教授の指導を受け、県内の英語担当者4名を研究委員に委嘱してその試案を作成した。テープレコーダーの使用であるから録音テープが当然必要であるが、予算の都合で作成できなかった。そこでこの教材の使用に当たっては、担当者が肉声で台本を読み解答させてもよいし、担当者がテープに吹き込んで使用されてもよいと思う。要は生徒に興味を持たせ、特に正確な読解力と音声英語が身につくように、その利用について工夫していただければ幸いである。

<研究紀要第94号>

高等学校世界史授業の試行 - 指導時間の短縮及びOHP利用

山口 一巳

その1。ふつう5時間ぐらいかかるところを1時間でやったらどうらるかということを試みた。無謀にして詳細な記録である。ところは西アジア。きょうタラスやアッパース朝で終わっても、何日後にセルジュークや製紙法をやる。その時またタラスやアッパース朝に言及することができる。2時間授業したということは、3日か4日、イスラムの池に生徒をつけておくことである。ところが1時間となると、それは1日でもない。1時間だけだ。教師は額に汗し、生徒は腰が痛くなる。これは涙ぐましくもこっけいな失敗の報告書である。それにしても高校ではどこまで教えればよいのであろうか。

その2。機械に弱い教師が初めてOHPに取り組んだ記録である。題材はゲルマン~ノルマン。OHPは8ミリヤスライドではない。教え方のアイデアを具現化したものである。また、未完成の

教材を提示する方がよりOHP的である。それにしても、生徒にとって印象が強かった教材ほどテストの成績が悪かったことをどう解釈すべきであろうか。また「授業に対する安心感がない」とか「黒板の方が印象に残る」とか言う生徒が少なくないことは、教師の未熟のせいだけだろうか。

＜研究紀要第95号＞

「市町村（学校も含む）就学指導委員会の現状と問題点」

山田 国重

待望久しかった養護学校の義務制が昭和54年4月から実施される。県教育委員会においても養護学校における義務教育の円滑な実施を図るため諸施策を講じている。心身障害児の教育については、特にその障害の相違が教育の内容、方法に重大な影響を及ぼすことを考えれば、それぞれに適した場での教育が望まれる。

昭和44年に出された「特殊教育の基本的施策のあり方について」の報告3. 判別と就学指導で、① 市町村における心身障害児の就学指導委員会の設置、② 各学校における心身障害児の判別と就学指導充実のための校務分掌上の組織と整備、全教員の分担と協力、知識と技術向上のための講習会等の研修、③ 市町村・学校に心身障害児の判別と就学指導に関する指導と援助を図るための都道府県教育研究所・教育センターに必要部門の設置と関係専門職員の配置等を指摘している。

本年度県下49市町村教委・公立全小・中学校における就学指導委員会の現状と問題点（昭51.7）の調査分析と6名の研究委員による実践研究の集録である。県下のこうした実態を参照され現場におけるより適正なる心身障害児の判別を就学指導の機能強化の糧ともなれば幸いである。

＜研究紀要第96号＞

教育相談に関する研究（第三集）

服巻清之・北川明彦

教育相談に関する研究紀要は、今年度で第3集となる。今回は、学校と教育研究所の連携による登校拒否児の教育相談事例集としてまとめた。

事例1は、小学校6年生の女子C子さんが、頭痛やひん尿などを訴えて登校拒否をくりかえした症状を、5年生から2か年にわたって、克明に観察した担任の記録である。

事例2は、小学校、わかす学級の5年男子B君が、家庭環境による情緒不安定から登校拒否をおこしつつあることを早期に気づき、担任として一年間、毎週一回来所し、その献身的なかかわりを記録したものである。

事例3は、中学校2年生のD君で、場面緘黙児で、なかなか自分の心の窓を開くことができなかったが、2年間、カウンセラーとして熱心にとり

くんだようすが、ありありと記されている。

事例4は、高等学校3年生のA君が、無断欠席の上、バイクのスピード違反で補導され登校拒否をくりかえした生活を、カウンセラーとして、学級担任と緊密な連絡をとりながら指導してきた事例である。

以上4つの事例をもとにまとめているが、他に当研究所の一年間の教育相談を紹介している。この紀要が学校現場での一指標として参考資料となり、検討を加えられれば幸いである。

\*\*\*\*\*  
\* お 知 ら せ \*  
\*\*\*\*\*

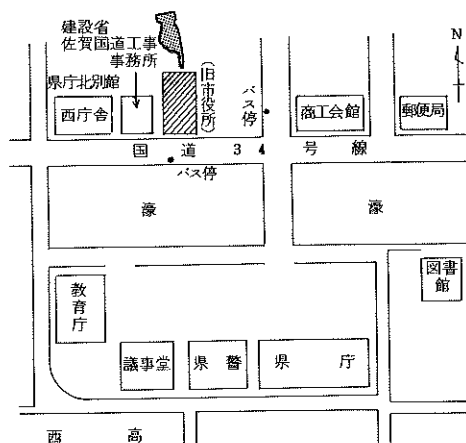
教育研究所は、下記の所に移転しました。

佐賀県立教育研究所

佐賀市松原一丁目一番一号

（佐賀県庁北別館東庁舎3階）

TEL 0952-24-2111（内線3262）



＜あ と が き＞

本報には、夏休み以降実施した研修講座について、講演要旨などを掲載しました。

また、本年度発行の研究紀要について、その概要を紹介しました。後日、紀要は各学校へお届けしますので、ご活用ください。

2月はじめ、現在地へ移転、所員一同、張り切ってやっております。

第 19 号

発行年月日 昭和52年3月10日  
編集・発行 佐賀県立教育研究所  
佐賀市松原1丁目1-1  
TEL (24)-2111内線3262  
印刷 昭和プリント社  
TEL (23)7439